

コロナ急落を受けて 3つのメッセージ

一向に収束の目途が立たない新型コロナウイルス。WHOによるパンデミック宣言が報じられて、世界の株式市場は混乱を極めています。NYダウ株価も、2月12日の高値29,551ドルから1か月で28%も下落するなど、株式市場は理性を失っているかのように思えます。このような時こそ冷静になって、過去の歴史と賢者から学ぶべきと考えます。

オットー・フォン・ビスマルク

(1897-1975:プロイセン首相)

大久保利通、伊藤博文はビスマルクに感銘を受け、維新政府の「富国強兵・殖産興業」策は彼の影響を受けている。



『愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ』

世界の株式市場は、200年間を超える歴史のなかで大きな暴落とその後の上昇相場を過去何度も繰り返してきました。2008年のリーマンショック(58%の大暴落)、2001年のITバブル崩壊(35%の暴落)、ブラックマンデー(1日で22%の下落;現在のNYダウで5000ドル近い下落)、…と、歴史上の大暴落において、投資で成功を収めている人は、一時の損失に見舞われたとしても、決してバスを降りなかった人たちであることは歴史が教えてくれています。今は、バスを降りるタイミングではありません。

なぜならば、ドルコスト平均法の理論をマスターされた人には説明の必要がないかもしれませんが、暴落相場はより多くの口数を購入できる絶好の機会だからです。百年に一度の大暴落といわれる2008年のリーマンショックでも、積立投資では信じられない成果を得ていたことをもう一度思い出してください。世界の株式市場で歴史上最も下落率の大きい1929年の米国株式市場(3年間で9分の1まで下落)でも、8年間積立投資を続けていたら70%もの投資収益を得られています。

*リーマンショックとITバブル崩壊は「世界株式インデックス」、ブラックマンデーは「NYダウ平均株価指数」

ウォーレン・バフェット

(1930~:現在89歳)

稀代の天才投資家。経済や市場を予測するのではなく、企業価値を計算して現在の株価とのギャップが収益源となる価値投資の理論を築く。



『皆さんは、スーパーに買い物に行ったとき、普段より安かったら買い、高い値段だったら見送りますよね？それが賢い消費者というものです。ところが、普段賢い人が株式市場になると、逆のことをするんですね。安くなると買いを見送り、高くなると買いを入れるんです。普段の生活でそんなバカなことしませんよね？』

2008年リーマンショックの急落局面で、多くの投資家は保有する株式の売却を急ぎました。そのなかで、「価値ある企業の株が安く買える」とバフェットは、叩き売られた米国企業の株を買いました。その時の彼のコメントは、「リーマンショックで世界経済は数年は厳しい状況が続くかもしれませんが、米国上場企業の価値は、今よりも10年後、10年後よりは20年後、必ず増大するはずだ」というものでした。実際、米国企業の一株当たり利益はこの10年で3倍になり、同株価指数も3倍を超えました。

コロナウィルスの影響で、世界経済は短期的にはダメージを受けるでしょうが、今よりも10年後、10年後よりは20年後、世界経済は成長を遂げているのではないのでしょうか？

ジョン・テンプレートン

(2008年、95歳で没)

ウォーレン・バフェットと並び称される天才投資家。価値ある企業を安く買う“伝説のバーゲン・ハンター”と呼ばれている。



『強気相場は絶望のなかで芽生え、懐疑のなかで育ち、楽観のなかで成熟し、幸福のなかで消えていく』

ジョン・テンプレートンもまたバフェットと同じく、「価値あるものを安く買う」天才投資家です。姪っ子のローレン・テンプレートンが、この点についての面白い逸話を提供してくれています。ジョンおじさんが、次のような面白い例え話をしてくれたそうです。

…週末の公園は、子供によるレモネードスタンドが風物詩になっています。ある少年が商売を引退しようと、スタンド一式を友人に100ドルで売却することを考えています。そこでクラスメートに実際の現場を見てもらうことにしました。最初は客足も順調で、「120ドル払ってもいい」、いや、「こっちは150ドルだ」と値が上がっていきます。

ところが突然雨が降り出すと客足もぱったり、さらには成績が1番の女の子が帰ると「僕たちが知らない特別な情報を掴んでいるに違いない」と疑心暗鬼のクラスメートたちも帰宅してしまふ。そこにいじめっ子が現れ、「50ドルなら買ってやってもいいよ」と、結局100ドルで売れる目論見が外れて50ドルになってしまいました…

テンプレートンがこの逸話を通して姪に伝えたかったことは、レモネードスタンドの価値は何も変化していないのに、人々の価値に対する認識だけがころころと変化していったことです。最後にビスマルクの言葉を借りるならば、愚者は日々の株価に振り回され、賢者は長期の企業価値に関心を払うということでしょうか。